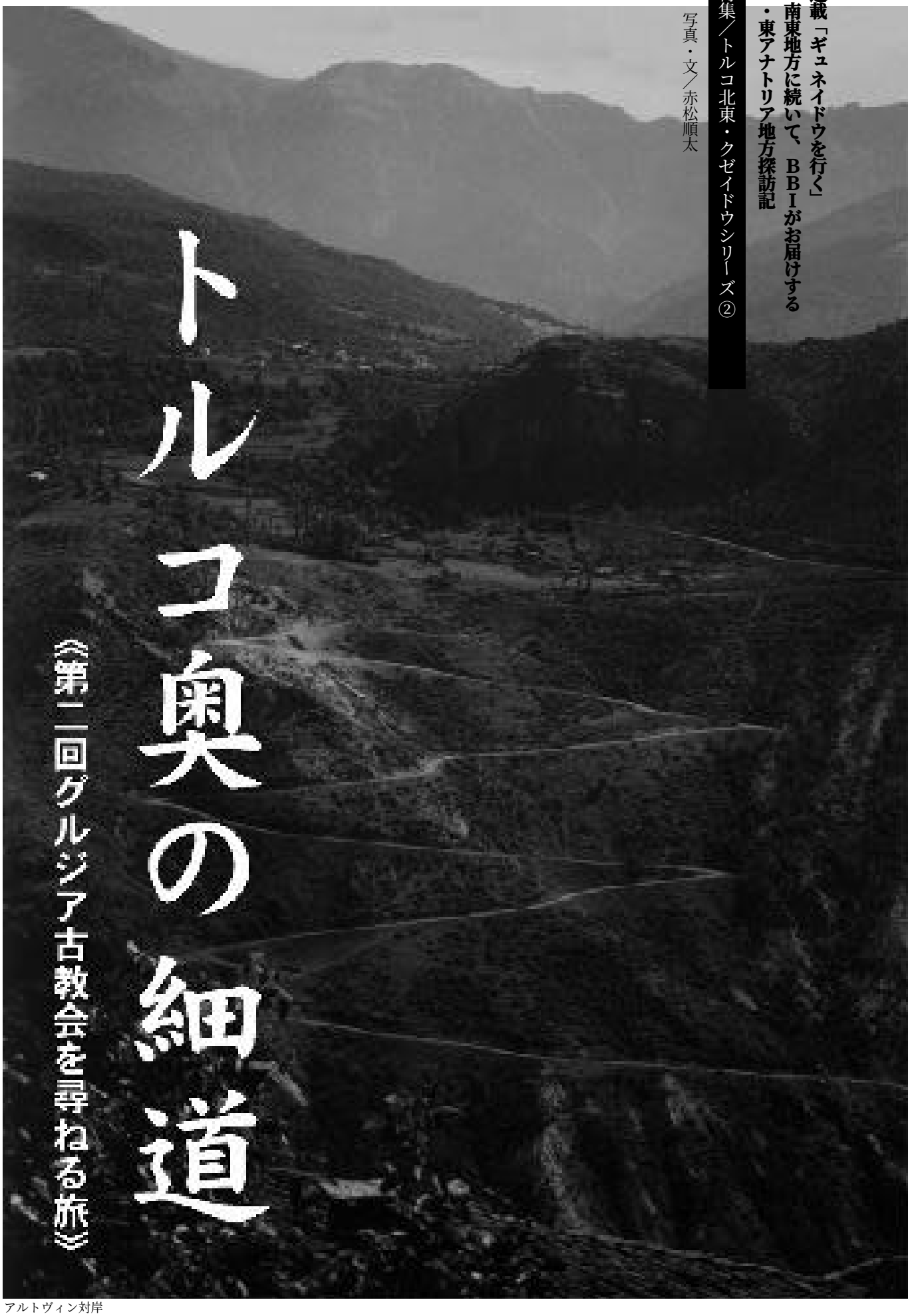
好評連載「ギュネイドウを行く」
トルコ南東地方に続いて、BBIがお届けする
トルコ・東アナトリア地方探訪記

連載特集／トルコ北東・クゼイドウシリーズ②

写真・文／赤松順太

トルコ奥の細道

《第二回グルジア古教会を尋ねる旅》



アルトヴィン対岸

西部・中部の華やかな観光地とはひと味違った、
「通」を引きつける奥座敷がクゼイドウ（北東地域）。
黒海の湿った風に育まれた森林、
三千メートル級の峰々に発する奔流、清流、
カフカスの異文明がもたらした栄光の残照、
固有の文化を守って生きる人たちのひっそりとした息遣い。
そうしたものを尋ねて旅を重ねた夫婦の記録と記憶が、
三回シリーズとして展開される。
今しばし豪華と絢爛を忘れて、歴史のひだに分け入ってみよう、
そこにきっともう一つのトルコが見つかるはずだ。
高低差数百メートルの山腹に沿って広がる不思議な町
アルトヴィンを基点に、中世グルジアの残照を求めて教会遺跡を訪ねる。

山腹の緑の中のアルトヴィンの町並
川沿いから最高部までは数百メートルもある

ユニークな坂の町 アルトヴィン

黒海沿岸を東へ進むと、やがてホパの町に着きます。地図を広げればすぐ先はもうグルジアと分かれば、はるけくも来るものかな、という感慨が湧いてくるに違いありません。ここでバスは右へ折れて山に向かいます。峠の海抜が約八百メートル程度ですから、それほどの大きな山越えではありませんが、雄大な景色が広がり、所々に校倉づくりの家々が目に入るはずです。

やがて下り勾配を一気に駆け下りると、ボルチカでチョル川を渡ります。この川の出口に、トルコとロシアとの間で争奪が繰り返された、今はグルジアの都市バトゥーミがあります。川を右に見ながら進むと、やがてアルトヴィンのオトガル。だがそこで町に入ったという印象は乏しいはずです。なぜなら町は川向こうの城壁のかなた、斜面のはるか上方にあって、たしかそこからはそのごく一部しか望めないからです。

その高所にある町へ行くには、ここでバスを乗り換えなければなりません。「アルトヴィン、アルトヴィン」という声にせき立てられてミニバスに乗り込むと、すぐにジグザグの急坂にかかり、だんだんに展望が開けて、やがて町に入ります。高低差は三百メートル、いやそれ以上かもしれません。こんな風変わりな町は私の知る限りここだけです。なぜこんな形なったのでしょう。まあ普通に考えられることは、川筋の水害を避けたということでしょうが、はっきりしたことは分かりません。

さて私は単身で、九〇年に初めてこの町にちょっと立ち寄りました。そしてその後は九五年、九六年と、二年続けて妻同伴で訪ねたのです。当初は漠然と、あとで述べるグルジア教会への足場とだけしか考えていませんでしたが、最初立ち寄ったときのほのかな好印象が、二度三度のわらじを履かせたということです。

ともかくこれだけの高所だから当然のことですが、町からの眺望は雄大で変化に富み、多少とも旅心のあるお人なら、きっと少なくとも数日は過ごしたくなるでしょう。そして嬉しいことには、英国のガイドブックで、「アンカラ以西で最上のホテルの一つ」と評されるカラハンホテルがこの町にあるのです。私も、多少この記事に影響されたきらいもありますが、ローカル色に溢れたいいホテルだと思います。英国人はオーナーをしきりと褒めて書いていますが、私はオーナーに

オシュキ教会遠望
この一帯、中世には行政の中心地だった

は会っていません。支配人のヤヴズ・ベイ（ヤヴズ氏）に好感を持ちました。愛想はないがいかにも重厚な、客に安心感を与える人物だと思います。

ただ一つ問題がありました。あとの話しなのですが、九六年の訪問のあと、トラブゾンから西へ進んでギレスンの町を訪ねたときのことです。この町は山形県の寒河江市と、さくらんぼの縁で姉妹都市になっていることから、ふと思いついて市長さんに面会を申し入れました。大歓迎でした。英語の話せる職員が付いての、市内観光と夕食とをアレンジしてもらったのです。彼は婚約者を同伴してきました。その彼女がアルトヴィン出身だというのです。

私はさっそくに、アルトヴィンに対する私たちの好印象を話し、カラハンホテルに泊まったことを告げたのです。するとどうしたことか、彼女は「キョトゥ（汚い）」と短く、履き捨てるような言い方で私たちに酬いたのです。一瞬戸惑いましたが、やがてことの次第が分かりました。彼女はこのホテルに泊まっている、ホテルが泊まらせている、例のナターシャのことを不潔に思っていたのです。

そういえばその前年、「ああこれがナターシャだ」と一見して分かる女性たちが、しきりと私を目で追い、そして横に付いている妻に、恨めしそうな視線を送っていました。翌年も同じような光景でしたが、二回目のこととて、私たちの意識から少し遠ざかっていたのでしょう。彼女はしきりに、故郷の家族の複雑な思いについて、つぶやくように語っていました。

その後の様子はどうなっているでしょう。もし今もナターシャさまがご活躍なら、きっとこのホテルでカモを狙っていることでしょう。

最初の年のことでしたが、滞在中近隣一帯が大雨で、足止めを食らってしまいました。支配人のヤヴズ・ベイは、多少気を使ったのでしょう、町の背後の高い山奥へ私たちを誘ってくれました。そこにアンチモニーでしたか、鉱山開発が行われるということで、その鍬入れに案内しようというのです。車に乗ると一人別の男が座っていました。彼はヤヴズ・ベイとなにやら話していますが、さっぱり分かりません。そして私の片言のトルコ語には一切返事をしないのです。いぶかしく思っている私にヤヴズ・ベイ言いました。「彼はグルジア人だ」。

これが私のグルジアとの最初の接触でした。そして今の国境とは関係のない民族の混在に、あらためて思いを入れたのです。中世に栄えたグルジア王朝の教会遺跡を、どうしても訪ねてみようと考え

アルトヴィンの市庁舎にある闘牛のオブジェ

ました。

山奥には大勢の労働者がいて、作業のかたわら鍬入れのお祝いの準備をしていました。千メートル以上の高地です。まもなく雷がとどろき、豪雨がやって来ました。焼き肉を頬張りながら右往左往。それでも珍しい日本人の夫婦の登場で、彼らも喜んでくれたようです。

山を下りる途中で、年に一度「闘牛場」になるという広場を教えてくれました。毎年六月、「カフカスの祭り」が催され、近郷近在から大勢の村人が集まっての、盛大な山の祭りだそうです。このときに「闘牛」が行われる、「牛と人間でなく、牛どうしなのだ」とヤヴズ・ベイ。私の故郷宇和島には、昔から伝統の闘牛があり、先刻承知のことでしたが、世界的にみれば、牛と人間のたたかいの方が有名なのでしょう。ともかく闘牛はアルトヴィンのシンボルで、市庁舎にもそのオブジェが飾られています。

中世グルジアとトルコ

私がグルジアという地名を知ったのは、第二次大戦が終わった少年の頃でした。今では悪名高い旧ソ連のスターリン首相が、グルジア人だと聞かされました。もっとも当時、グルジアとソ連との関係を十分把握していたわけではありません。

その後、ゴルバチョフ大統領のペレストロイカ推進に際して、盟友だったのがシュワルナゼ（外相）でしたが、彼はやがてゴルバチョフとたもとを分かち、ソ連崩壊後に独立したグルジア共和国の大統領になって、現在に至っています。

十年近く前に、一度グルジア映画を見たことがあります。女性が村の掟を破ったということで、リンチまがいの制裁を受けて死ぬという内容のものでしたが、当時まだグルジアは、私にとってそれほど身近な存在ではありませんでした。恥ずかしい話ですが、ジョージアという英語名がグルジアと知ったのは、九五年のカラハンホテルでのこと、アメリカ人の老夫婦が「明日はジョージアに入る」と語った時のことです。

ともあれ教会遺跡を訪ねる前に、ここで私たちにはなじみの薄い、中世グルジア王国について、簡単に触れておきましょう。

グルジアはアルメニアとともに、または対比して論じられることが多いのですが、アルメニアがアーティストや学者を輩出していること、またトルコとの政治

古城址から見た中世グルジアの中心地
アルダヌチの現在

的関係で比較的よく知られているのに比べて、ずっと知名度が低いようです。もともと双方に人種的な違いがあったわけではなく、部族間の勢力争いに、教義解釈をめぐってのギリシャ正教との関係の対立が加わって、二つの民族に分かれていったようです。

いずれにしても両民族ともに、古代からの長い歴史の中で、常に周辺の強大な民族に圧迫されつづけていますが、それでも中世の一時期には、ともにそれなりの隆盛を誇りました。そしてその後もグルジアの場合、盛衰をくり返しながら、一九世紀の初頭、ロシアに征服されるまで、稀に見る長期の王国として続いています。

手近な日本語の文献が乏しく、また地域的な関係が不分明で、正確な記述はとうていできませんが、中世グルジア王国の歴史を簡単に年代記的にまとめてみましょう。

八世紀頃、アルメニア、グルジア地方にバグラティッド家が興る。

九世紀初頭、バグラティッドの支族バグラトゥニ家のアショットが、北東アナトリアに植民し、現在アルトヴィンの東二〇キロにある、アルダヌチを都として国を建てる。

アショットはビザンチン皇帝、イスラムのカリフの双方と好関係を保ち、それぞれからこの地方の首長の称号を得た。

アショットの後継者たちはその後も領土を東に広げ、八八八年アダルナゼ四世が自らをグルジア王と宣言。

九七五年に即位したバグラット王がさらに領土を広げて、ビザンチンとの間に緊張が高めたが、のちにバグラット四世に至って政略結婚によって和解。

十一世紀後半、セルジュク・トルコの勢力が増大したが、グルジアはその外にあった。

一一二一年、ダヴィッド四世はセルジュク・トルコを破り、トビリシ（現在のグルジア共和国の首都）に首都を移す。

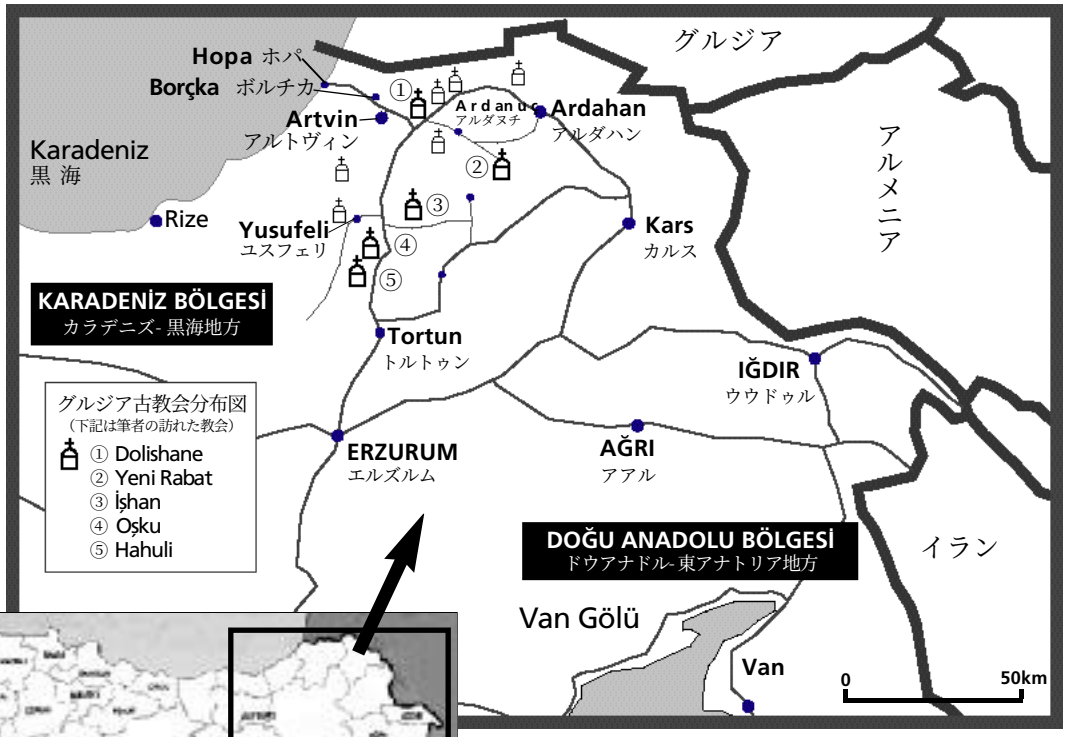
この頃領土は全コーカサス、アナトリア北東部に広がり、首都アニを含むアルメニアの領土をも支配下に置いた。

一一八四年から一二一三年の間君臨した、タマラ女王のもとで繁栄は頂点に達した。

その後周辺諸民族との争いが続くが、一二三六年モンゴル軍によって東部を奪われる。

グルジア古教会を訪ねる（その一）

アルトヴィンの付近に、古い教会遺跡があると知ったのは、九〇年の旅の折でしたが、調べてみると、訪ねるのはそれほど容易ではなさそうなのです。ホテルのヤヴズ・ベイに聞いて、タクシーを雇いました。雨が上がった滞在三日目の朝



トルコ全国地図

深い緑の中に鎮まるイェニ・ラバット教会。比較的によく保存されている。

です。息子がパイロットだとのドライバーの自慢話を聞いているうちに、チョル川の支流をさかのぼる道に入りました。やがてハンマムルの村、そしてまもなく「ドリシャネ（教会名）」の標識を目印に山道へ急旋回。ここからが恐怖のドライブでした。現世を超越するための修行の場ですから当然なのでしょうが、スメラ僧院にしても、カッパドキアのウフララ渓谷にしても、正教遺跡の所在は大変な場所です。あとで前記のアメリカ人の奥さんが、「ジェットコースターみたい！」と語ったとき、私たちは大いに共鳴したことです。

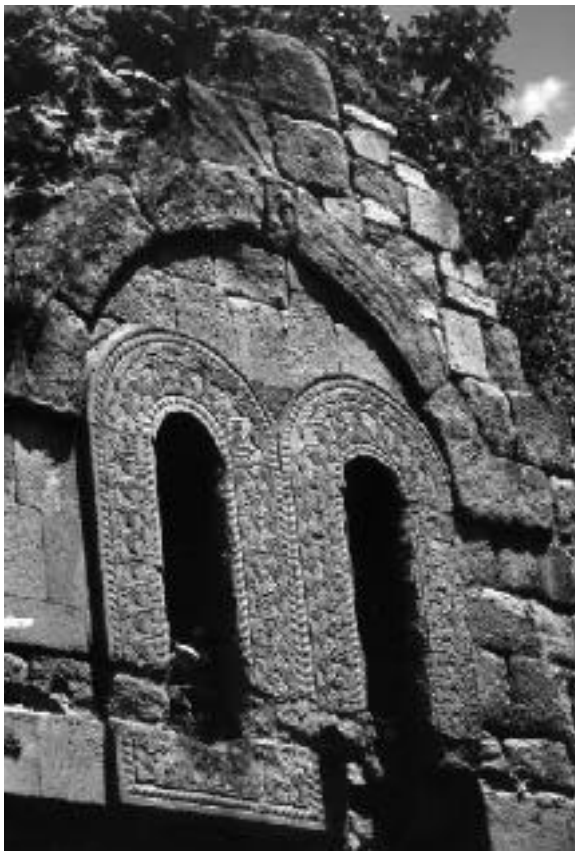
長く感じましたが十分程度の命がけドライブののちに、この時代の教会遺跡に特徴的な、とんがり屋根が見えてきました。もっとも遺跡といっても、現在モスクとして使われているそうです。かわいらしい少女がコーランの勉強に来ているといって紹介されました。こじんまりした建物の内部は壁画で彩られています。外壁に彫られた日時計が印象的でした。案内書によれば、一〇世紀中期に在位した中世グルジア王国のスンバット一世の建造と、外壁に記されているそうです。

登る以上に恐怖を覚えつつ国道に下りた私たちは、右へ折れてアルダヌチを過ぎ、次の目的地イェニ・ラバット教会に向かいました。村道に入ってからの悪路に悩まされながらも、前方には緑の山腹が広く美しく広がってきました。やがて校倉づくりの小屋の並ぶ部落を抜けると、その先の木立の蔭から、苔むしたとんがり屋根が姿を現したのです。

英国の学者によれば一〇四〇年頃の建造とのこと。内部は黒く焦げていましたが、全体的には旧状を保っているといってよいでしょう。ドリシャネと同じ建築様式ですが、今はまったくの遺跡です。たたずまいとしては一層の詩情を感じさせました。翌年も含めて五つ見た中でも最高のものといってよいでしょう。

静かな風景でした。村人が珍しそうに私たちを眺めていたので、ちょっと声をかけると、たちまち村自慢を始めました。ドイツに行っていたそうですが、うるさくてやりきれなかった、ここが自分の故郷、何といっても故郷が一番、というような意味だったと記憶しています。

帰途アルダヌチの城壁を眺め、町中で一服しました。この日は、前記二ヶ所の教会遺跡を回るということで、タクシーと契約していたのですが、ドライバーのおっちゃんがにじり寄ってきました。もう一つ、イシュハンを見せたいというのです。たしかにイシュハンは、代表的な教会遺跡として紹介されています。日もまだ高いことですし、私も見たいとは思っていたので、すぐに料金交渉には入り、やがて折れ合いました。すぐにアルトヴ



イシュハン教会のレリーフ
一帯に残るレリーフの中で最も繊細なもの一つ

ィン方向に戻る国道を走り始めたのです。

朝方に通った川の合流点から左（南）へ折れて、本流沿いに約六十キロ、ほとんど断崖の下を通ります。小一時間ほど走って、幾つ目かの合流点を左に折れると、やがて標識が現れました。ここからが山道、しかもこの辺はほとんどが禿山なのです。見上げて恐ろしさいっぱいでしたが、けっきょくは最初のドリシャネに比べると、多少は道幅もあり救われました。

約一〇分の山道ドライブの後、山上のオアシスに来ました。さらに山の高所から、きれいな水が豊かに流れてきています。教会脇の学校で一息入れてから、建物の正面に回りました。その日に見た前の二つに比べて、より壮大な印象を得ました。外構の総延長は三六メートルもあり、屋根もイェニ・ラバットなどに比べて、より鋭角的に天に向かっているようです。そして何よりレリーフが美しく、中世グルジア王国の文化的発展を偲ばせるに、じゅうぶんなものを感じました。

この教会の起源は、先ほど記した年代記よりも以前、七世紀の中ごろにさかのぼるようです。その建物は、アラブの侵入時に破壊され、一〇三二年、バグラット四世によって再建されたことが彫り込まれているそうです。

三つの古教会を見て、急坂の上り下りや、田舎道の悪路に悩まされながらも、私はすっかり満足しました。ただ三ヶ所ではあまりに少ない、もう二つ三つは訪ねたいものだと思いながら、一年を過ごしました。

グルジア古教会を訪ねる（その二）

こうして翌九六年、性懲りもなくあと二つの遺跡を訪ねるために、夏のある朝エルズルムをあとにしたのです。出発の前日にちょっと傑作なことがありました。博物館の職員に信頼できるタクシーを斡旋して欲しいと頼んだところ、彼はおずおずと「私が…」と申し出てきたのです。給料だけでは生活の苦しい公務員のこと、やむを得ないと考えて了承しました。白タク（今は死語？）です。

このコースは以前九〇年に単独行を試みました。ただイランからの国境突破（？）の疲れが尾を引いていたせいか、バスの前半はかなり眠り込んでいたのでしょう、途中に美しい湖があったこと以外ほとんど覚えていません。この湖は、九六年の再訪でトルトゥム湖であることを確認しました。いかにも神秘的な湖です。

さて峠を越えると流れの向きが変わってきました。トルトゥムの町を過ぎ（湖はもっと北にある）ウズンデレ近くで左へ小道を入ると、一五分くらいでしょうか、ハフリ教会のある部落にたどりつきます。じっさいたどり着くという感じで、一般の観光客はまず来そうにありません。それだけに歴史を回想するにふさわしい環境が、そこにあったのです。

教会は部落の一隅、森の中に鎮座するという印象で幽玄さを湛えていました。十世紀後半の十字形の建築、場所柄のせいかあまり大きく見えませんが、やはりその長い一辺は三四メートルもあるとのことです。扉が閉まっていたので、外観を眺めているうちに、番人がやってきま

した。ここもドリシャネと同じく、今モスクとして使われているのです。内壁には天使の物語を残したままで。

ささやかに喜捨を置いて外に出ると、建設中の新しいモスクが目に入りました。聞けばハフリの古教会は近々に、モスクとしての役目を終えるとこと。純粋の歴史遺産として維持されていくのか、管理がおろそかになってさらに朽ちていくのか、前者であろうことを祈りつつ、元来た悪路を幹線へと向かいました。

もう一つのお目当て、それはオシュキないしはオェスク・ヴァンクです。ウズンデレから北上して、やはり左へ折れました。ハフリへの道と違ってかなりの幅員もあり、谷もより開けていました。やがて木立の間から特有のとんがり帽子が見えてきます。もっとも案内書によれば、ここは単に教会所在地というのでなく、中世グルジアの行政の中心の一つでもあったようです。ただそうした建物の現存は皆無です。

碑文によればこの教会は、九六三年から七三年にかけて、アダルナゼ三世の二人の息子によって建てられた由、ただし現存の部分は一一世紀に、ビザンチン皇帝バシル二世などの手によって、改造されたものだそうです。

ここでちょっと愉快なことがありまし

南正面から見たオシュキ教会

オシュキ教会の南面のレリーフ
古代シリアの聖人像

た。珍しく他のグループがいたのですが、その中の一人はどう見ても東洋人の女性でした。でもとかく日本語で話しかけて韓国人だったりすることが多いので、ここは慎重にトルコ語を用いたのです。奇妙な表情が待っていました。彼女、正真正銘の日本女性だったのです。民俗音楽の研究家のMさんでした。普通の観光地ではない、意外な邂逅（めぐりあい）を得た彼女とは、今も交遊が続いています。

建物正面の聖人のレリーフは、何とも印象的です。そして各所に中世グルジア文字の壁書きが見られます。かなり崩れかけていますが、四〇メートル以上の長さを持つ外観は美しく、壮麗という言葉がふさわしいでしょう。断ち難い風情を払って帰途につきながら、何度も振りかえって、とんがり屋根との別れを惜しんだことです。

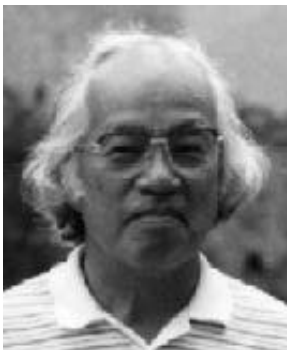
以上二つの遺跡は、アルトヴィンから出かけるなら順序が逆です。そしてじつはその中間（少し谷分かれして）のユスフェリの町の奥に、すばらしいドルト・キリセと呼ばれる古建築があるはずです。私たちは、ユスフェリまでは行きましたが、洪水のせいもあって、その奥を知りません。最近その川筋では、トレッキングが盛んになっているそうです。探検をお勧めしておきましょう。

この日私たちは北上して、一年ぶりにアルトヴィンを訪ね、カラハンホテルの客となりました。定宿の気安さ、従業員もほとんど顔なじみでしたが、前年ほどの活気はなかったようです。聞けば前年に訪ねた鉱山開発も、公害問題が騒がれて中止したとのこと、ほぼ同じ季節だのに欧米人の家族連れもほとんどいませんでした。でも前にも書いた通り、ナターシャさんは相変わらずでした。

さて中世から現代に戻ってみて、今トルコの隣接国の中では、グルジアとの関係が最も無風に近いかもしれません。もちろんグルジア共和国内のアブハジア自治共和国で、主流を占めるイスラム教徒の分離運動は、絶え間なく続いているようで、多少の火種はあるにはあるのでしょうが。向こうにイスラム教徒が残り、こちらにグルジア人がひっそりと住んでいる、そうした民俗の分布はいかにも興味を引きます。

次回はさらに東へ進んで、より緊張の歴史を伴なうアルメニアの残照を訪ねてみましょう。

＊次回をお楽しみに
最終回『カルスと東部国境の遺跡アニに迫る』



■筆者のプロフィール

赤松順太（あかまつじゅんた）
昭和６年、愛媛県宇和島市生まれ。
京都大学法学部卒業。
三井物産在職中の昭和56年より
４年間トルコに勤務。
退職後も数回渡航し、長期の滞在経験あり。
＜著書＞
『新トルコ風土記』『アナトリア旅情』（写真集）
『トルコ生活紀行ートルコで日本を考えるー』
その他雑誌等に寄稿多数。